

## 大規模地域開発における受益と被害

—諫早湾干拓農地を事例として—

東京大学大学院人文社会系研究科  
開田奈穂美 nmkaida@gmail.com

### 1. 目的

大規模な地域開発がなされた結果として、地域には正負含め様々な影響が見られる。これまでの社会学的研究においては、開発による受益者を対象には開発の受容の側面に、受苦者に対しては被害や事業への反抗の側面に焦点を当てた研究が蓄積されてきたと言えよう。しかしながら、地域開発問題においてその影響を、受益／受苦という二分法によって区別することは、「受益≒加害」「受苦≒被害」という誤った想定を導きかねない。

本論では、開発の受益者に焦点をあて、彼らが開発から得たものとは何であるのか、開発の利益に浴しながら生活するとはどういう意味を持っているのかを明らかにする。

### 2. 方法

本論において取り扱う諫早平野の農業者たちは、国営諫早湾干拓事業の受益者とされる人々である。防災と農地造成を目的とした国営諫早湾干拓事業は、1989年に着工し、2007年に完工、2008年からは造成された新干拓地において営農が開始されている。この干拓事業は、計画段階から漁業者や自然環境保護を訴える人々によって反対がなされてきた。事業に反対する漁業者らと、事業を現状維持しようとする農業者と長崎県の対立はこう着状態に陥っている。

利害関係者同士による話し合いによって解決を呼びかける漁業者側に対して、農業者と長崎県は話し合いに応じることを拒絶している。このような硬直的な態度はどのようにして形成されたのか、干拓農地における農業者へのインタビュー調査、長崎県や農林水産省の資料等をデータとして解明していく。

### 3. 結論

干拓事業による受益の中身を詳しく見ていくと、農地の水環境にとって干拓事業が必ずしも十全な利益を与えているとは言えない。不足していた農業用水に関しては事業によって解決されたものの、排水不良の問題が依然として残っているからである。訴訟によって現状維持をはかり、漁業者側との交渉を通じた問題解決を拒否するというのが農業者と長崎県のとる立場であるが、こうした状況に関する農業者自身の「わりきれなさ」の存在があることを指摘し、この「わりきれなさ」とは、高度に政治的な問題である諫早湾干拓問題の存在に対して、農業者自身が彼らの手の届く範囲に問題とその解決を取り戻そうとする試みの表れであることをインタビューデータの分析と共に示す。